

## 好きな研究と役に立つ研究



朝 日 剛

大学教員になって30年が過ぎようとしている。バブル絶頂期、一流企業で働くかつての同級生を横目に、古く薄暗い大学の研究室で‘修行僧’のように研究していた博士学生の頃を振り返ると、自分の選択は正しかったのか、と今でもときどき思うことがある。とはいえ、博士課程に進み、さらには大学教員にまでなったのは、やはり研究が好きで、論文を読み、実験することが楽しかったからにほかならない。当時、指導教授から与えられた研究テーマが、超高速時間分解分光手法による溶液中の光誘起電子移動過程の解明であった。試料の脱気に必要なガラス細工や超短パルスレーザー装置の調整など、とにかく実験が面白く、世界レベルのトップデータを研究成果として出せることに喜びがあった。それから今日まで大学に籍を置き、自身に興味のあることをテーマに据えて「好きな研究」を何とか続けてこれたことは、非常に幸せなことに思える。

この30年の間に大学を取り巻く社会の状況、そして大学そのものも大きく様変わりしてきたことは、私と同世代の方々はよくご存じのことと思う。大学進学率の増加とともに大学教育そのものが質的に大きく変化してきた。さらに、大学での研究も様変わりしている。短期的な研究成果が求められ、ふたこと目には何に役立つのかと訊かれる。また、何か研究をしようにも、外部資金・競争的資金を獲得しないとできない。そうなると、やはり「役に立つ研究」をしなくては、となる。製品開発や技術開発にどう繋がるのかなど社会問題の解決、あるいは知的好奇心の満足でもよいから社会にどう貢献できるのかを常に考えざるを得ない。一方で、それとは別に、研究へのモチベーションは個々の研究者の純粋な好奇心がなければ維持できるはずもない。そのためには、競争的資金の獲得につながる研究が必要であり、研究者にとっての「役に立つ研究」となる。「好きな研究」をしたくて大学教員の道に入ったが、続けていく中で「役に立つ研究」が重要であり、今後ますます強く意識することが研究者としての大学教員に求められていくと考えている。

さて、私と日本分析化学会との繋がりには、10年ほど前に愛媛大学工学部応用化学科の分析研究室に移動してからのので、新参者である。そのときに分析化学会に入会し、中国四国支部の幹事として仲間に入らせていただいた。それまでは、レーザーや顕微鏡を駆使した分光分析装置を開発し、それをツールとして光反応や物性の解明を目的とした基礎研究を物理化学や光化学の関連学会で発表してきた。分析化学会の年会・討論会に参加して改めて感じたことは、分析化学は‘実学’により近いということである。分析化学と機器分析装置開発が、自然科学の学問分野はもちろん、医療、食品検査、製品管理、など多岐の応用分野で不可欠であることは言うまでもない。そこには「役に立つ研究」の種がたくさん転がっているはずである。

[Asahi Tsuyoshi, 愛媛大学大学院理工学研究科, 中国四国支部長]